

再生建築における〈転用〉の建築論的分析及び実践的検証

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古澤, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20263

2018年度 理工学研究科

博士学位請求論文（要旨）

再生建築における〈転用〉の建築論的分析及び実践的検証

古澤 大輔

1 問題意識と目的

スクラップアンドビルドから脱却を図る既存ストック活用の分野が注目されて久しい。2010年に閣議決定された新成長戦略においては、中古住宅・リフォーム市場の倍増を2020年に実現するという目標が掲げられている。総務省の「住宅・土地統計調査」によれば、住宅の空き家率は年々増加しており、平成25年度の調査では13.5%という過去最高の数値を示している。また、国土交通省の「建築物ストック統計」における延床面積の推移を見れば、住宅・非住宅を問わず、過去最高の数値となっている。そして、大量の既存建物が余剰となった現状と、持続可能なサステナブルな社会の実現という昨今の社会的な流れとが呼応し、建築の再生へのニーズが高まっている。このような状況の中で、再生建築に対して多方面から議論が持ち上がるのは、既存というものが先立って存在するがゆえ、計画を遂行する上で様々な建築的制約を受けているからである。しかし、建築専門誌において、再生建築に関する建築家の思想や意匠的側面を紹介する記事は、新築に比べて著しく少ない。再生建築は、様々な建築的制約を解決する手段として、劣化した躯体を再生させる技術論的側面や現行の建築基準法へ適合させる法律論的側面、或いは、空き家率の上昇を低減させる社会論的側面や市場動向などの経済論的側面から論じられる傾向にあるのだ。これら社会的な問題への道徳的な応答という再生建築の一側面が前面に押し出されると、各方面の政治的な正しさを容易に引き寄せるがゆえ、建築を再生する行為自体が肯定され、結論が先回りした議論に陥ってしまう可能性が指摘できる。ともすれば、建築の創作に必要な自己批判回路を断ち切ってしまう危険性が孕んでいるのも事実であろう。建築を再生することに対する社会的なニーズが高まる中で、再生建築を一過性のムーブメントに済まさない為にも、創作論的観点から議論を深めて行かなければならないのである。「形態は機能に従う」というルイス・サリヴァンのかの有名なテーゼを引き合いに出すまでもなく、空間と機能との関係性を構築するという事は、その関係性の結び結び方の様相を含め、建築を設計するという行為の本質的側面のひとつであろう。であるならば、建築の再生とは、空間と機能との相補的關係を問い直すことであり、既存空間への転用的操作を持ってして、空間と機能との新たな関係性を再構築するという事である。

本研究は、再生建築における既存構築物への転用的操作とはどのようなものなのか、転用の構造に関する実態を明確にするとともに、転用の結果としての再生建築が、既存ストック活用の賦活化にどのように寄与し得るのかの考察を通じ、筆者らが実際に作品発表した近年の再生建築の実例を詳細に論じながら、実践した転用的操作に対し検証を行なうものである。そして、ここで得られた転用の方法と対象に関する知見を新築の実例に応用し、再生建築に対する議論の拡張性と創作論としての有用性を示すものである。

2 構成及び各章の要約

本論文は8つの章から構成されており、第1章から第3章までを「概論編」と位置づけている。

第1章では、研究の背景から再生建築の位置づけを述べるとともに、研究の目的と、その今日的な意義を明らかにした。

第2章では、建築専門誌に見る再生建築の動向を概観し、議論の偏りが生じていることを指摘した上で、施設が有する空間構造と制度が誘導する社会構造との対応関係を考察した。また、建築の機能に関する歴史的な知見を整理し、かつて、同時多発的に勃興した近代建築に対する批判運動と、再生建築を取り巻く状況との間に親和性が認められることを明らかにした。形態／機能／主体／地域／時間といった、建築を設計する上で避けては通れない今日的な問題系を、再生建築が串刺しにしている点を示唆し、建築の再生を考えることが、近代的尺度を乗り越える為の契機を与えるものであることを明確にした。そして、「物理性」「意味性」「目的性」という既存建物への3つの視点を導入し、再生建築を多角的に考察する為の指標を提示した。

第3章では、既存建物に対する劣化的な状況を、一般的に認知されている物理的劣化、機能的劣化、社会的劣化という3つの観点から整理した上で、その劣化要因が、既存建物の「物理性」「意味性」「目的性」とどのような対応関係にあるのかを明らかにした。また、消極的解体、積極的解体、修復的改修、保存的改修、転用的改修といった、2つの解体種別と3つの改修種別に分類し、本研究で考察する転用的改修の位置づけを行なった。そして、転用操作によって既存建物が再生される構造を、時間概念を実装させたダイアグラムで記述し、転用的改修による再生メカニズムを明確にした。さらに、劣化という作用因の種別の考察を通じて、転用的改修が統合的再生方法であることを示し、転用という建築的操作が、具体的な「既存空間」と抽象的な「参照空間」を結びつける横断行為として位置づけられることを明らかにした。加えて、転用の方法と対象を、「物理性」「意味性」「目的性」の視点から分類した上で、実例を挙げながら具体的な考察を行なっている。その結果、物理的転用、意味的転用、目的的転用という3つの転用方法を定義することが出来た。

第4章から6章までは「実践編」と位置づけられており、再生建築の実例を各章1作品ごと詳細に論じながら、物理的転用、意味的転用、目的的転用という第3章で提示した転用分類に基づき検証を行い、考察を加えている。なお、ここで取り上げた作品事例は全て筆者らが設計監理を行なった竣工済の再生建築である。

第4章では、従業員の増加による床面積の不足という「目的性」の劣化が作用因となり、隣地に対する増築によって再生したオフィスビルを題材にして、転用の方法と対象について検証している。「寸法」と「モジュール」、「部分」と「全体性」をそれぞれ結合させる<反復>や<切断>という2つの物理的転用の方法を明らかにした。また、「型」と「形式性」、「記号表現」と「記号内容」をそれぞれ統合させる<顕在化>や<明示・暗示>という2つの意味的転用の方法を明らかにした。そして、これらの結果として、「施設の空間構造」と「制度的社会構造」を結びつける<既存コアの共有>という目的的転用が施されたことを明らかにし、「概論編」で考察した再生メカニズムの実践状況を検証した。

第5章では、既存躯体の老朽化や設備機器の旧式化という「物理性」の劣化が作用因となり、階段室を流用することによって再生した集合住宅を題材にして、転用の方法と対象について検証している。「型」と「形式性」、「形態」と「タイポロジー」をそれぞれ接続させる<コアの導入>や<フラグメント化>という2つの意味的転用の方法を明らかにした。また、「用途」と「ビルディングタイプ」、「施設の空間構造」と「制度的社会構造」をそれぞれ結合させる<エレベータシャフト化>や<履歴書の作成>という2つの目的的転用の方法を明らかにした。そして、これらの結果として、「部分」と「全体性」を結びつける<全階段室の流用>という物理的転用が施されたことを明らかにし、「概論編」で考察した再生メカニズムの実践状況を検証した。

第6章では、住宅地の風景が分断されたことによる既存構築物への相対的な性能低下という「意味性」の劣化が作用因となり、記号化を用いて再生した高架下を題材にして、転用の方法と対象について検証している。「寸法」と「モジュール」、「部材」と「要素」、「部分」と「全体性」をそれぞれ結合させる<コンテナの流用>や<フレームの重ね合わせ>、そして<目地の転写>という3つの物理的転用の方法を明らかにした。また、「ユーザー」と「コミュニティ」、「施設の空間構造」と「制度的社会構造」をそれぞれ横断させる<機能の拡張>や<時間的・空間的編集>という2つの目的的転用の方法を明らかにした。そして、これらの結果として、「記号表現」と「記号内容」を結びつける<ファサードの記号化>という意味的転用が施されたことを明らかにし、「概論編」で考察した再生メカニズムの実践状況を検証した。

「拡張編」として位置づけられた第7章は、これまで論じてきた転用の方法と対象、及び再生メカニズム

に関する考察を新築の実例に応用することで、論としての有用性と拡張性を示すことを目的としている。なお、ここで取り上げた事例は、筆者が設計監理を行なっている現在進行中の新築作品である。

本事例は、建物運用方針の変化や家族構成の変化による不具合という「目的性」の劣化が作用因となって計画が中断していたものであり、検討案を既存建物に見立て、転用的改修という統合的再生方法を、新築におけるスタディプロセスの中に位置づけている。

ここでは、「型」と「形式性」、「記号表現」と「記号内容」をそれぞれ統合させる〈図形の解体〉や〈床と梁の分離〉という2つの意味的転用の方法を明らかにしている。また、「部分」と「全体性」、「部材」と「要素」をそれぞれ結びつける〈呼応〉や〈転写〉という2つの物理的転用の方法を明らかにしている。そして、これらの結果として、「施設の空間構造」と「制度的社会構造」を結びつける〈規範の転換〉という目的的転用が施されたことを確認し、「概論編」で考察した再生メカニズムが新築の実例に実践された状況を検証した。

第8章は、本論文のまとめであり、研究の成果を結論として示すとともに今後の課題を明らかにしている。

本研究で示されたのは、具体的な対象と抽象的な対象を時間的に統合する転用という行為の創造性であり、建築が具象体であり抽象体であるという両義的事実である。この事実が育む地平の上では、再生建築と新築を区分することはそもそも意味をなさず、その境界は必然的に融解するものと考えられる。社会的、或いは経済的、もっと言えば政治的な各方面からの建築を再生することに対する需要の高まりによって、再生建築のみならず、建築という営為それ自体に硬直化した状況を招かない為にも、転用（diversion）が多様性（diversity）を担保させる建築的創造行為のひとつであることを示した本研究は参照価値を有するものと考ええる。